

Book Reviews

Towards multilingual education: Basque educational research from an international perspective. (多言語教育に向けて：国際的な視点からのバスク自治州の教育に関する研究)

By Jasone Cenoz

Multilingual Matters (2009) 269 pages

はじめに

現在、グローバル化が進展する中で、グローバル人材に相応しい資質として、世界に通用する共通言語の必要性が全面に浮上してきている。その風潮の中で、共通言語の外国語や本来の多数派言語教育だけでなく、少数派言語などを含む、文化の多様性を重んじる多言語教育も一層注目されている。今日、その要請に対応すべく、複数言語による有効な教育実践が求められているが、本格的な研究は依然として少ない。

バイリンガル教育の範疇内には種々ある。その中で少数派言語を母語とする児童が、社会における主流言語に適応する傍ら、母語継承をも促すものや、特定の地域に限定される言語での教育を試みるものもある。本書はそのような中で、多言語主義や多言語教育の研究分野で示唆に富むものであると評価できる。バイリンガル教育制度の分類や多言語教育に関する理論的枠組みについて詳しく分析されており、世界諸国における多言語教育の現状を把握するに相応しい例も多く掲載されている。とりわけ、本書が特化しているバスク自治州（スペイン北部）における多言語教育は、特殊な教育背景にあり、多言語教育を考察するにあたり注目すべき事例である理由が二つある。それは、第一に、系統不明の少数派言語であるバスク語（Euskera・エウスケラ）は、教育の主な教育言語となっているからである。また、バスク語を家庭内言語とする子どもに、第二言語として多数派言語のスペイン語に続き、教育の初期段階から英語なども外国語として教えている学校もある。第二に、スペイン語を家庭内言語とする子どもをはじめ、移民した家族の下で育つ子どもも、バスク語を教育言語として教育を受けている現状が挙げられる。これらの特徴を踏まえ、バスク自治州における多言語教育を多面的に検討している本書は、多言語教育の研究分野に参照されるに値する文献であると考えられるため、以下にそれを紹介したい。

本書の構成

本書の構成は次の通りである。まず、第1章では、多言語主義の概要について筆者の視点からの解説が施されている。今日、教育初期段階からの多言語教育は、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が採択している「文化的多様性に関する世界宣言」に則っている。また、個人の認知能力や第一言語を向上させる効果が挙げられることから、深淵な地域統合を実施してきたヨーロッパ連合は、「一国家一言語」という言説からの脱却に伴って、多言語教育を推進してきた。欧州委員会は、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）などを導入することにより、多言語主義の理念を実践に移している。

筆者は、バスク自治州立大学の研究者ということもあり、優れた洞察力によりその地域の独自性に考慮した長年の研究成果を本書で紹介している。例えば、第2章では、多言語教育を考察する際に、言語間の距離だけでなく、個人の置かれている社会状況も踏まえるべきであるということが本書での論点であると述べている。換言すれば、ミクロのみならず、マクロレベルでの関係性を含めることが重要であるという主張である。また、第2章では、複雑に絡み合うミクロ・マクロな要素をより正確に網羅するために、多言語教育を分類する手段として *Continua of Multilingual Education* の有用性が説明されている。これは、多言語教育を俯瞰的アプローチから捉えるために、諸言語間の類似性や社会の言語的および教育的な状況の相互作用も含めるものである。ここで考案されている *Continua of Multilingual Education* に、本書の独自性が認められよう。本書では、世界での多言語教育のそれぞれのプログラムだけでなく、国内の諸地域における学校を比較するに大いに活用できるものとして提案されている。このツールは、日本の教育現場における多言語性を考察するためにも大変実用的であると考えられる。

続いて第3章と第4章では、マイノリティ言語のバスク語による教育やバス

ク自治州における多言語教育の詳細について説明されている。3章では、スペイン内戦後、1970年代に初めて法律の保護を受けたバスク語学校の原型であった *Ikastolak* (イカストラック) での言語復興運動をはじめ、2001年におけるバスク教育委員会が下した法令 (Decreto 15/ 2001, BOPV 16-2-2001) により、バスク語の使用促進を目標に成立している教育相談施設の *Berritzeguneak* (ベリツェグネアク) について触られている。さらに、多言語教育に対応するために、独自の少数派言語での教材作成や、最新技術を駆使したバスク自治州の教育に関する具体例も数多く紹介されている。また4章では、経済協力開発機構 (OECD) による生徒の学習到達度調査 (PISA) の結果を踏まえ、世界各国の中における、バスク自治州の教育が位置づけられている。それらの調査結果で、生徒の成績に悪影響を与えるものは、少数派言語であるバスク語などによる多言語教育よりも、むしろ、経済的な問題に苛まれることであると論証されている。

バスク自治州政府は、公立学校のゲッター化 (*ghettoization*) を懸念し、各学校に外国籍児童が占める割合を 30%未満とすることを要求している。それは、外国籍児童がバスク語などでの多言語教育に支障なく適応させるための選定である。しかし、外国籍児童は均等に分布しておらず、スペイン語圏諸国から多くの家族が移り住んでいるため、バスク自治州では採用する学校が最も少ないモデル A¹への集中が看過できない。外国籍児童の学業遅延などに対応するために、バスク語という独特の言語に対する言語学習支援の強化や様々な試みが散見されるが、移民者の諸言語などといった多言語が共生するには、異文化間コミュニケーションに必須である「多言語意識」を育むことが最も重要であると論述されている。

第5章から第7章にかけては、バスク自治州での英語教育について論じられている。国際共通語となっている英語に対しては、一般的に早い段階から教育での導入が要求されてきた。この需要に応じて、元来バイリンガル教育が主だったバスク自治州においては、英語が第3言語として登場した。第6章では、多言語教育での各言語間の距離がいかに関与に英語学習に影響を与えるか検証されている。「交差言語的影響 (*cross-linguistic influence*)」に関する調査を基に、英語学習過程で、単語を思い出す際に、バスク語で教育を受ける児童でも、バスク語で認識するのではなく、英語との類似からスペイン語で思考していることが判明している。よって、バイリンガル教育では、言語に対する「メタ認識」がより育つものと議論を展開している。第7章では、言語系統不明のバスク語を含むバスク自治州のようなバイリンガル教育が第3言語である英語学習に好影響を及ぼすのかに関して論考している。その中で、第3言語を習得するには、バイリンガル教育による影響は一因にすぎず、学習態度や学習者が既に身に付けた言語での相互作用を多面的に捉える必要があると主張している。

第8章は、教育の諸言語に対するスペイン児童の態度やそれらと結びつく児童のアイデンティティを対象にした既成調査を要約している。さらに、第9章では、バイリンガル教育ないしは多言語教育を論じる際に不可分である言語習得に最適な年齢期とされる言語習得開始年齢に関して述べている。世界で2番に使用者数が多いとされるスペイン語に続き、バスク地方 (スペインのバスク自治州・ナバラ自治州およびフランスの南部) で通用するバスク語と異なり、英語はバスク社会と所縁が少ない。英語教育は、バスク語およびスペイン語の運用能力の上達を妨げないものの、バスク社会との関わりが浅い英語が教育の初期段階から導入されても、必ずしも教育後期段階より高レベルに到達するとは限らないようであるという結論を出している。

最後に、第10章では、バスク自治州立大学 (*Euskal Herriko Unibertsitatea*・EHU) が世界に発信できる研究機関として英語教育を促進しつつ、マイノリティ言語のバスク語を教育言語とする難しさが議論されている。

以上、バスク語の復活に貢献したバスク自治州の教育現場では、他の言語との類似性が程遠いこの少数派言語は主たる教育言語となっている。バスク自治州の例に焦点化した本書は、バスク語という特殊な言語を含めて、社会における多数派言語であるスペイン語や国際共通語となりつつある英語などを含めた多言語教育に関する展望も記されている。

講評

バスク自治州の教育は、近年の外国籍児童の増加に伴い、より一層多言語化が進行している。外国籍児童や他国に関係を持つスペイン生まれ児童の増加により、バスク自治州の多言語教育にさらなる課題が浮かび上がっていることが本著から自明となった。第一に、家庭でバスク語やスペイン語を使用しないこれらの児童は、現地で最も一般的な教育言語モデル D の教育現場に属すが、学校以外に、バスク語と触れ合う機会が少ないため、成績に悪影響が生じるだけでなく、学年に相応するスペイン語運用能力に到達できない可能性も想定される。第二に、より経済的な困

難に陥りがちな外国籍児童の多くは、PISA 調査で最も悪い成績を修めている公立学校に圧倒的に集中しているため、彼らを保護する新たな試みが必要である。

バスク自治州では、放課後に母語継承教室を設けている学校が極めて少ないだけでなく、適応が困難を伴うとされるバスク語を含む言語教育モデルへの対策に傾倒している。しかし多文化的な背景を持つ子供には、言語支援に留まった方策より、むしろそれらの児童の多様なアイデンティティと密接に結ばれる「自尊感情」「自己肯定感」育成に取り組む試みが優先的であるべきと言う議論もある(佐藤, 2014: 202)。例えば、日本の教育現場では、学校の教員が外国籍児童の子どもの家庭言語である母語に精通しなくても、母語の学習を推進することにより、母語継承への意欲が増すだけでなく、外国籍児童のアイデンティティも肯定された事例が挙げられている(真嶋・他 2013: 34-35)。小規模社会である学校においては、学業遅延に陥っているこれらの児童に対して教員との相互関係を通してアイデンティティを構築する(Empowerment theory)ことで、児童の学習が向上する秘訣が潜在している(Cummins, 1996: 147) と言えるのではないか。

なお、学業支援の観点のみならず、現在ヨーロッパでは、多言語主義の理念が標榜されている要因は、ナショナル・アイデンティティから離脱し、各地域を統合的に共存させるに不可欠な「ヨーロッパ市民性」が育成されるべきであると考えられているからである(西山, 2011: 9)。しかし、多言語教育が盛んなバスク自治州では、外国籍児童の増加に伴った教育課題だけではなく、バスク社会の中で色濃く見られる「地域アイデンティティ」と「ナショナル・アイデンティティ」の軋轢が完全に姿を消しているわけではない。多言語教育現場においても、教育言語モデルのスペイン語およびバスク語に対する児童の態度やそれらと結びつくアイデンティティは、「スペイン」と「バスク」というアイデンティティからなる二項対立軸から脱却しきれていないことが多い。つまり、外国籍児童の増加に伴い、ますます多言語化しつつあるバスク自治州では、多言語教育が盛んに実施されているものの、異なる文化的背景の間で育つ児童の共生に不可欠な多文化的アイデンティティ、もしくはアイデンティティの多元性が育まれているかはまだ解明されていない。多国籍児童が集うバスク自治州の多言語教育現場は、児童のアイデンティティ形成に焦点化する大きな意義を持っており、最適の地域であろう。しかし、依然としてエスノグラフィ的なアプローチを援用した実践例が皆無に等しい。さらに、バスク自治州政府が定義している「外国籍児童」または「移民児童」には、外国籍を有する児童のみを指しており、他国にルーツを持つスペイン生まれ児童(移民二世など)をも含む研究は比較的少ない。

以上の通り、多文化なルーツを持つ子どもに対して、いかに多言語教育に順応させるかは、現在バスク自治州の教育現場が抱えている最も切実な課題であると言える。バスク自治州の多言語教育現場に関して、言語学習に留まらず、より多文化的な視点から児童の現状に注目するさらなる研究の必要性が一層高まってきていると言えよう。そして、そのような調査の有意性は、外国籍児童などの統合度合いを証明するばかりか、アイデンティティの多文化性に対する現地児童の寛容性も解明すれば、系統不明言語の故郷で強く結ばれる「言語」と「アイデンティティ」の本質主義的な解釈を超えた研究成果も期待できる。

Reviewed by Efraín Villamor Herrero
Yamaguchi University

参考文献

- Cenoz, J. (Ed.) (2008). *Teaching through Basque*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (1996). *Negotiating identities: Education for empowerment in a diverse society*. Los Angeles, CA: California Association for Bilingual Education.
- 真嶋潤子・榎井千穂・孫成志 (2013) 「日本で育つ CLD 児における二言語とアイデンティティの発達：中国語母語話者児童 K 児の縦断研究より」、『日本語・日本文化研究』23, 16-37 頁。
- 西山教行 (2011) 「外国語教育と複言語主義」、『外国語教育フォーラム：金沢大学外国語教育論集』5, 3-13 頁。
- 佐藤郡衛 (2014) 『異文化間教育学—文化間移動と子どもの教育—』東京：明石書店、第2刷発行。

¹バスク自治州では、三つの教育言語モデル(A・B・D)から選択して履修することができる。まず、スペイン語モデルのモデルAは、スペイン語での教育が主だが、週に数時間バスク語を第2言語として習う。バイリンガルモデルのモデルBは、本来スペイン語とバスク語での

均等な割当時間から成立していたが、実際には現在ほとんどの教科がバスク語で行われる学校もある。最後に、バスク語モデルのモデル D では、週に数時間学ばれるスペイン語以外、すべての教科はバスク語で実施される。モデル D は 7 割以上の学校で採用されており、現地の人から最も支持を受けている。いずれのモデルも 4 歳から英語教育を導入しており、時に特定の授業を英語で行われる場合もある。

Translanguaging: Language, Bilingualism and Education

By Ofelia Garcia and Li Wei

Palgrave Macmillan (2014) 175 pages

外国語能力向上の為の新たなアプローチとして、CLIL (Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習) や IB (International Baccalaureate 国際バカロレア) の実践報告が昨今盛んになされている。本書で取り扱われている *translanguaging* も外国語教育関係者の間で関心が持ち始められた概念であるが、CLIL や IB が言語教育手法や教育理念であるのに対して、*translanguaging* は複言語環境での言語使用に関する言語観をも包摂する部分で大きく異なる。また、「言語別システムを複数個」持ち合わせているとする従来のバイリンガル (3 言語以上の複言語使用者も含む) 観に対して、*translanguaging* では「複数の言語資源が混在した言語体をひとつ」持ち合わせているだけであるとバイリンガルを捉え直した。metrolingualism, multivocality, polylingualism など新たにバイリンガル観を捉え直そうとする同様の用語が現在多々提起されているが、社会言語学的な側面だけでなく教育への応用も提起している点で、*translanguaging* が代表語として定着しつつある。この分野に興味や関心があるのであれば、最初に読むべきは本書である。

内容は大きく 2 部に分かれており、パート 1 には理論面が、パート 2 では教育への具体例が記載されている。本書の最も大事な部分は、理論的基盤としてパート 1 で繰り返されているが、ポスト構造主義の中での言語観の大きな変化をバイリンガリズム研究と第 2 (外国語) 教育に取り入れた点にある。従来、言語は抽象的な文法から成り立つ静的存在と捉えられ、バイリンガルは独立した 2 言語システムを有すると考えられていた。これに対してポスト構造主義では、言語記号資源 (*semiotic resources*) を人間はひとつ持っているだけであると捉えられた。このような言語観シフトにより、母語話者と非母語話者の区別は不要となり、両者を等しく「社会生活を営むのに必要なコミュニケーション遂行のために言語記号資源を駆使 (*linguaging*) する言語使用者 (*languager*)」であるとした。これは、母語話者の絶対的存在の瓦解と、非母語話者が永遠に負わされていた呪縛からの解放も意味した。このシフトにより言語は静的な文法ルールから成り立つものではなく動的なものとして捉えられ、コミュニケーション毎に意味交渉が発生し、参加者は自らの言語記号資源を戦略的、効果的に使用する (*leveraging*) と考えられるようになった。この理論的枠組みの説明には社会言語学者の文献が引用のみならず、2 言語同時賦活を裏付ける神経言語学分野の成果やダイナミック・システムズ・セオリー等様々な分野からの知見が紹介されている。

パート 2 は 5 つの章から成り、最初の 2 章はこれまでのバイリンガル教育現場の現状と問題点が指摘され、続く 2 章では改善する為の具体的な *translanguaging* 教育実践例が紹介され、その教育実践をする教師への提言が最終章でなされている。幼稚園から小中高校での各教科や ESL の授業、更にはアメリカ在住日本人への土曜補習校の授業実践等多岐にわたる具体例が記されているので読者は興味のある部分だけを読み進むことができる。全ての例の底流にあるのは *translanguaging* 教育のコアとなる目的と対象者である。従来のイマージョン教育や外国語教育では、学習者の母語か対象言語のどちらかで授業が行われてきたが、両言語併用 (*translanguaging*) 教育によりいかに批判力と創造力が育まれ、深く新たな視点の獲得に繋がるのかが各具体例の中で説明されている。また学習開始直後の学習者と、非常に高いレベルに達したバイリンガルとではそれぞれ言語学習に対する目的が異なるが、*translanguaging* 教育は全ての対象者に効果的であることが、レベル差の甚だしい学習者の混在する土曜補習校での継承語教育現場等を実例として紹介されている。この教育目的はいみじくも最近耳にすることの多い 21 世紀型教育の目的とびつたりと合致しており、ヨーロッパで地域言語と教科学習を同時に行うことを目的に始まった CLIL でも *translanguaging* を組み込むことで更なる教育効果が期待できる。

以上が本書の概要であるが、読者層にはこの分野の研究者や大学 (院) 生に加えて、現場で教育に携わる教育者も含まれる点を鑑みると少々気に掛かる点もある。本書は 7 章立てであるが、第 5 章まで読み進んで現場での応用例が紹介されていない。第 1 章にこのような具体的な応用例が一つでも紹介されたと、本書前半の 80 頁を割いて

詳細に説明されている理論編の飲み込みが格段に容易になる。また"languageing"や"leveraging"の単語に関して、初出時には説明がなされているが、この分野で用いられている独特の意味を巻末に用語集(glossary)として簡潔に記載すると読者にとってはありがたい。更に、著者は2名から成っていて、章単位での分筆が明らかであるが、章によっては冗長な表現が多々あり、バイブル的役割を担う本書としては、簡潔でわかりやすい表現での統一が望まれる。最後に、重版・改訂版時には是非修正すべき部分としては、94項最終行から95項に繋がる"In these pedagogy enables university educators to communicate appropriate being language teachers."が挙げられる。単純な編集ミスとしか考えられないが、全く意味をなさない文章である。

ただしこのような改善点は些末なものであり、バイリンガリズム研究及び外国語・第2言語教育現場に対して大きなうねりを生み出し得る画期的な概念を提起し、更にその応用例まで記載している本書の意義は大きい。

Reviewed by Hideyuki Taura
Ritsumeikan University

Hapa Japan (Vol. 1 History, Vol. 2 Identities & Representations)

By Duncan Ryuken Williams (Ed.)

Kaya Press (2017) 520 pages (Vol 1), 444 pages (Vol 2)

Whether you say *half*, *double*, *mixed* or *hapa*, the wide variety of terms used to identify Japanese of multi-racial backgrounds serves as an intimation of the enormously complex nature of the sociopolitical and identity-based issues that such individuals continue to face today. *Hapa Japan*, a two volume anthology of works by 35 authors from a variety of fields and personal backgrounds, succeeds in providing a comprehensive look at these issues and perhaps more importantly, giving a voice to people who have actually lived and experienced them. Through a combination of detailed historical, biographical, and first-hand accounts, the authors guide us on a journey through time and across the globe, looking at the lives of Japanese of mixed ancestry, and the societies they lived in. The collection simultaneously reaffirms and challenges our notions of what it means (and has meant) to be a multi-racial individual. Due to space limitations, this review cannot do justice to all the chapters, but will instead pick up on just a few that held particular appeal for the reviewer.

Volume 1 features nineteen chapters devoted to the exploration of the history of mixed-race Japanese, spanning from Japan's formation (as far back as the Jōmon period) to the present day. In doing so, it seeks to provide historical context to the Japanese conception of race, racial purity and how people of multi-ethnic backgrounds were regarded and treated in their respective settings.

Through the examination of ancient historical documents such as the *Nihon Shōki* (Japan's second oldest written history), historian Nadia Kanagawa explores the nature of foreign relations in early Japanese society (710-1185 AD). In her chapter, *Approach and Be Transformed: Immigrants in the Nara and Heian State*, she directly calls into question the legitimacy of the concept of Japanese purity, a prevalent narrative of ethnic homogeneity that continues to shape views on foreigners and multi-ethnic people even today. "There was never a purely Japanese or purely 'native' population," writes Kanagawa (Vol. 1, p. 16). According to her, the lineages of the Japanese emperor Akihito himself can be directly traced to King Muryong of Paekche, an early kingdom on the Korean peninsula. This position, which stunningly Akihito himself has publicly discussed, stands in the face of the often overt racial discrimination and political tensions between Japan and Korea in modern times.

This questioning of Japanese purity is a ubiquitous theme throughout the volume, such as in the chapter by historian Gary Leupp entitled *Placed on Par with All Other Japanese: Hapa Japanese in Japan and the World*. Focusing on the lives of multi-racial Japanese from 1543 to 1859, he points out that anthropologically speaking, the Japanese peoples' origins can be traced to the mixing of Yayoi (who came into Japan from the Asian continent by sea in the 4th century BCE) and Jōmon people (a group of unknown origin already living on the continent). He also notes that a genealogical register compiled in 815 shows that a quarter of all noble families in the capital at that time were of mixed Chinese or Korean ancestry. Leupp's chapter additionally explores Europeans' conceptions of race, most interestingly the notion within the biblically based European racial schema of Semitic people, black Africans and Whites, Japanese were from the

outset regarded by them as white and thus regarded as equals or at times even as superiors.

Volume 1 establishes a rich historical basis through which to view issues surrounding identity formation among multi-racial Japanese, which are explored within the 17 chapters that comprise Volume 2. Where Volume 1 tends to focus on broader, overarching, macro-level historical investigation, Volume 2 hones in on issues and individuals in a more fine-toothed fashion.

Perhaps nowhere is this granular attention to the micro-level more apparent than Tim Greer's chapter, *This Kid's a Hafa: Accomplishing Multi-ethnic Identity Through Reported Ascriptions*. Through the use of the micro-analytic research approach Conversation Analysis (CA) and Membership Categorization Analysis (MCA), Greer explores how multi-ethnic individuals accomplish their identities through everyday interaction. The participants in this research were all multi-ethnic Japanese teenagers discussing their own experiences living in Japan. It is clear that these teenagers have extensive experience with being treated as *others* by Japanese and one way that this is done is through the use of ascriptions that index certain competencies in certain activities. His participants for example, refer to other Japanese as being impressed or surprised at their ability to perform certain tasks that "would be considered unremarkable for members of that category," such as eating sushi or using chopsticks. Conversely, this otherization can also occur when multi-ethnic individuals are called on to demonstrate competencies as a means of justification for their membership of a certain group: a common example being asked to speak English. Greer notes that such a request inherently casts its recipient as non-Japanese since the activity, speaking English, is generally bound to the identity category non-Japanese. He further writes that "this places the multi-ethnic Japanese person in an interactional dilemma" (Vol. 2, p. 100), since not complying with such a request denies them recognition of their abilities and creates scrutiny that leads to further distancing between themselves and their peers.

Looking at these issues from a completely different perspective is Leilani Nishime's chapter, *Manga or Marvel?: Multiracial Japanese/American Visual Narrative in Indie Comics*. Nishime makes the argument (through a review of two selected works) that comics, a hybrid medium that melds visual and textual elements is particularly suited to the representation of mixed nationality and mixed-race. She contends that this goes beyond the superficial level: "My argument here is not simply one of parallelism –mixed image/texts are like mixed race– but rather that the kind of meaning making necessitated by the juxtaposition of image and text can help us think through some of the thornier questions about the social function of mixed race in contemporary, trans-Pacific culture" (Vol. 2, p. 189). Nishime argues that an erasure of multiracial history and the projection of a future post-racial utopia have led to the neglect of mixed-race Asians in the present. This consideration of post-race as a linear inevitability means that stories that follow simple linear timelines are insufficient for describing mixed peoples. She maintains that where traditional mediums are limited to linear progression, comics are able to circumvent it through clever use of frames and spatial representation. It is never made clear however, why other mediums are incapable of, or less ideal for, achieving similar effects. In reality, the subversion of linear narratives is prevalent in novels, film and art in general, leaving the logic behind this contention questionable. She also argues that the works she critiques "bring to fore the mutual influences of both U.S.-style and manga cartoon aesthetics" (Vol. 2, p. 203). While certainly true, this too is not something unique to the graphic novel format within the realm of artistic expression. Musicians, artists and writers have consistently drawn upon such East-West fusions in their work (as anyone who has read a Murakami novel would be aware).

Overall, the Hapa series provides a comprehensive look at historical and contemporary issues of multi-ethnic identity thanks to its wide variety of perspectives and approaches that each of its authors bring to the table, and this brief review only scratches the surface of the insights the book provides. While this of course means that certain chapters were more personally relatable than others, both volumes were packed with enough interesting information that made it an enjoyable read both as a multi-ethnic person and as someone generally interested in historical and sociological issues. It should also be noted that while it is a two-volume set, the books can be read as stand-alone works or in reverse sequence without issue.

Reviewed by Zachary Nanbu
Kobe University

